横芝の碑（その三十三）

〈南川岸の三夜様〉

横芝町屋形の浜附近は、遠洲浜松等から技術と知識を導入した養鰻業が盛んですが、昔は、地曳網等の海浜漁業が隆盛を極めていたようです。

そのためでしょうか、海の安全を祈る祠や碑が、其処彼処に点在しています。本紙一二七号でお報らせしました八大竜神もその一つですが、この竜神様から程近い、土地改良十号用水路の畔に建っていて、近所の人が三夜様と呼んでいる石仏も、また、海の安全を祈って建てたものといわれています

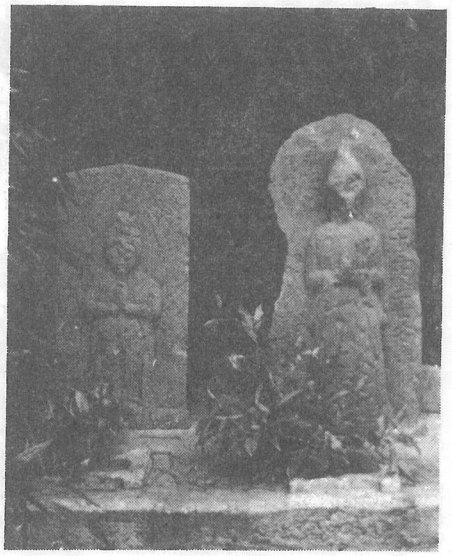
上堺南の四角を海の方に下り、左手の工場を過ぎますと、その向うの方には、海岸独特の趣を見せながら立ち並んでいます。この松林のすぐ手前で道は二つに別れています。この道を右に入りますと十号用水路に突当ります。この水路沿に養鰻場の方に上り、水門の橋を渡った堤の下に、由緒有気な数本の松と、竹藪に囲まれて静かに立っておられるのが、その三夜様なのです。

三夜様の境内？は、奇麗に舗装されていますが外界を遮ぎり、後の声群で囀るよしきりの声と松籟それに水門の堰を落ちる水音が聞えるだけ、という全く人里離れた感じがする所です。

この石仏は、元は、いますこし上の堤に桜の大木が繁っていて、その根本に建っていたのですが、十号排水路改修の時に、いまの場所にお祭りしたのだそうです。その時、奇篤な一人のお婆さんが、「露座では勿体ない」というので石仏の屋根と、鎮座場所のコンクリート舗装の寄進を申出ました。これに心を打たれた伊藤勝夫さん（南川岸）という人が自分所有の現在の土地を無償提供されたということです。

附近の人々の話では、「昔、この辺りは大きな沼があり、沼の畔から、蓮沼方面に農道が通じていたらしい。その農道は、今でも一部が残っているので、この三夜様は、きっと道路端に建っていたと思われる。ここの三夜様は三夜菩薩をお祭りしてあり、海の安全を祈って建てたものらしい。」と言うことでした。また、九十九里町からお嫁に来た、という或る女の人は、「私の生家の方では、三夜様というと、毎月二十三日に、子安講みたいに、女の人達が集って楽しみ会の様なことをやる風習がありますが、此処では余りやらないようですね。」と言っていました。

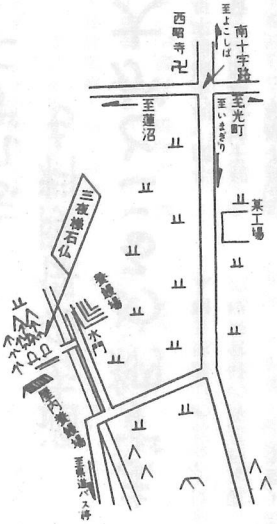
三夜菩薩―元々勉強と研究心に欠けていることでもありますが、余り耳にしたことのない称名なので心の中で恐縮しながら、とに角御立像にお詣りをして、改めてそのお姿と、刻まれている文字を見なおしました。



石仏は二体で、並んで右側の正面には、中央の顔の部分は毀損して判りませんが、どうやら女体らしく、胸のあたりで合掌された立像が刻まれ、奉成就二十三夜、二世、安禾攸、○永元壬申○月、助十郎、惣兵衛、安兵衛、長七郎等と刻まれています。○印は判読ができない部分ですが、二十三夜、とあること等から考えますと、九十九里町に伝わる風習と共通するものがあるようにも思われます。また、左側の石仏は右側のより、稍小さく、正面中央には、童女の様な姿の立像が刻まれ、側面には、海中安全、享和二年十一月、施主嘉吉と刻まれています。

享和二年といいますと、今から百七十年余り前のことになる筈ですが、右側の年号欠損部分を判読しましても、百七十年前頃に、下に永の字の付く年号が見当らないのは私の研究不足でしょうか、或いは、この二体の御仏体が別々のものであるかもしれません。

広辞苑、或いは学研百科辞典等を繙いて見ますと、三夜＝結婚三日目の夜、又は誕生後三日目の夜をいう。十三夜＝陰暦十三日の夜は十五夜に次いで月の明るい夜とされている。特に九月十三夜は、栗名月、豆名月と呼んで秋の収穫物を月に供える風習の他、女名月とも呼び、月と女性の関係について、古くからの伝承もあるらしい云々、とあります。産みは海に通ずる等という解釈は仏罰を被るでしょうか。ともあれ、ここの三夜様は、二体お揃いで海の安全についても、善男善女に有難い供徳を授けておいでのことと思います。

写真は、その石碑で、向って右側には二十三夜等と刻まれ、左側には海中安全等と刻まれていますがあど気ない童女の像が何とも言えず魅力的な顔立ちをしています。

（養護老人ホーム小沢所長寄稿）